

## (学校の「アレ」は今) ギョウ虫検査 寄生虫との闘い、「手洗い」広める使命

2023/08/27 朝日新聞 朝刊 24ページ 1213文字

小中学生のころ、学校でよく使っていた「アレ」。20～40代の記者たちが探ってみると、教育や社会の変化が見えてきました。2回目は「ギョウ虫検査」です。

学校に行く前に、ぴったん。

青いセロハンをお尻に貼った「ギョウ虫検査」は2016年、健康診断の必須項目から外された。その3年前、文部科学省の検討会。議事録には寄生虫研究の第一人者の声が残っている。「まだこんなことやっているのかと」目黒寄生虫館の巖城（いわき）隆研究室長によると、ギョウ虫は「そこまで危険な寄生虫とは言えない」と言う。

ギョウ虫は世界的に分布している寄生虫だ。メスは1センチ程度。オスはメスの3分の1ほど。口から感染した後、盲腸に寄生する。人が寝静まると、肛門（こうもん）からはいでて、1万個ほどの卵を産む。

卵が下着やシーツについたり、お尻をかいた手で物を触ったり。それらを別の人が触り、口に持っていくと、その人も感染する。そのループで人から人へと感染させていく。巖城さんは「通常の場合、お尻がかゆくて落ち着きがなくなる。不眠になる程度」と話す。

寄生虫検査が始まったのは戦前。当初は20センチほどの「回虫」などを対象にした「検便」だった。

当時、畑では処理をしないままの大便を肥やしとして使っていた。そのため、寄生虫の寄生率は高かった。検査が必要だったことに加え、学校現場で「手はしっかり洗う」などの教育が必要だったとみられる。巖城さんは「どちらかということ、『このような寄生虫がいるから手を洗いましょう』という衛生教育の一環という側面が大きかった」と分析する。

化学肥料や薬の投与で、寄生率が一気に減ってくると、検査はギョウ虫をターゲットに。1958年に義務化された。

ギョウ虫は、戦後すぐは80%以上の子どもに感染が見られた。だが、高度経済成長期（55～73年）の間に洗濯技術などが発展。水に流されてしまうギョウ虫の卵には苦難の日々となり、こちらの寄生率もみるみると減っていった。

現在は検査をしていないため、寄生率はわからない。15年度の学校保健統計によると、幼稚園（5歳）で0・06%、小学校（6～8歳）で0・12%だった。

15年に健康診断から外される議論が大詰めを迎えた際は、九州の各県が難色を示した。卵は湿度と温度を好むため、寄生率が他の地域より高かった。

寄生虫との闘いのために学校で培われた「手を洗う」という行動は、コロナ禍でも多くの人を救った。「寄生虫に効くワクチンはない」と巖城さん。ギョウ虫は一吹きのアルコール消毒では死なない。そして今もどこかで、私たちの近くで生き続けている。

手を洗うことが最大の防御、なのだ。（江戸川夏樹）

◆感想や、教育に関する情報をお寄せ下さい。edu@asahi.comまたは〒104・8011 朝日新聞東京本社 社会部教育班へ。

### 【写真説明】

ギョウ虫検査で使われるセロハン＝東京都目黒区の目黒寄生虫館